



# 我が国のこれからの スポーツ振興の方向性

## 1 21世紀のスポーツ振興の基本理念

### 生涯スポーツ社会の実現

これからのスポーツ振興に関する(財)日本体育協会(以下「本会」という。)の使命は、国民の一人ひとりが豊かで活力のある「生活/暮らし」を目指し、生涯を通じたライフステージにおいて、自己の能力・適性、興味・関心等に応じ、主体的にスポーツ文化を豊かに享受することのできるスポーツライフを築き上げていくという社会、いわゆる「生涯スポーツ社会」を実現していくということです。

### 生涯スポーツ社会の実現に向けて

生涯スポーツ社会の実現を目指し、国民の一人ひとりがスポーツに対する多様なニーズや能力に応じて主体的なスポーツ実践能力を高め、継続的なスポーツ実践者の増大を図るためには、スポーツ文化を豊かに享受する能力を育成することのできる、資質や能力の高い指導者の存在が不可欠なのです。

本会は、この「生涯スポーツ社会」実現のための具体的な事業の

一つとして、中央競技団体をはじめとする加盟団体とともに、社会の要請に的確に応えることのできる指導力を備えた責任あるスポーツ指導者の養成事業を実施しています。

## 2 スポーツ振興の具体的視点

### スポーツのある人生

かつては、人生において「スポーツをする」時期というのは、ごく限られた年代の時期にしか行われなかったもののように捉えられていましたが、実際には、そうではありません。

例えば、乳児期においては、ハイハイをすることや家族との触れ合いという行為そのものが全身を使います。そのこと自体をスポーツとは呼びませんが、体を動かす「運動」という意味ではスポーツに関わっていると言えます。

10歳未満ぐらいでは、友達との触れ合いなども増し、楽しみながら知らず知らずのうちに身体を動かし、また、地域の野球クラブやサッカークラブに所属する子どもも出始め、自らの意志でスポーツを始めます。

10代、20代では、自らの欲求から、より専門性の高いスポーツを追求したり、仲間と楽しくコミュニケーションをはかるためにスポーツを行ったりします。

30代、40代では、子どもや家族、仲間とのコミュニケーション、自分自身の生活の充実をはかるため、また、日常の仕事からリフレッシュするためなどにスポーツを行います。

50代、60代では、気持ち良い汗をかきたい、体力を維持したい、老化を防止したい、スポーツをすることで生きがいを感じたいなどの理由からスポーツに携わることが考えられます。

このように、個人によってスポーツをする目的は様々です。ライフステージに応じたスポーツへの取り組み方があるとともに、これまでスポーツを行っていなかった人々にとっても「スポーツとの出会い」は、どの年代でもあります。

また、競技力向上を目指し、自らの限界に挑戦しつづけるトップアスリートは、世界で一番になる、世界で活躍したいなど自らの目的を叶えるために「生活／暮らし」の中心にスポーツがあります。

トップアスリートたちは、激しく苦しい練習に耐えながら自らの目的を達成するために、その他の欲望に惑わされず生活しています。これも「スポーツのある人生」の一つです。

しかし、トップアスリートとして活躍してきた競技者もいつかはその競技生活からリタイアする時が訪れます。目的達成のために身体を酷使し、挑戦し続けたスポーツとの別れも、スポーツとの決別の時ではなく、人生の中では単なる通過点に過ぎず、スポーツへの新たな携わり方のスタートを切る時となるのです。

## スポーツへの多様な関わり

日本のスポーツは、学校体育や企業スポーツを基盤とした「する」スポーツを中心に発達してきました。

しかし、少子高齢化やバブル崩壊後の長期的な経済不況、急速な高度情報化など、社会的背景の変化とともに、企業スポーツ等の衰退、子どもたちの体力低下、国際競技力の低迷など、スポーツ界も多くの課題に直面しており、スポーツ環境の整備についてはこれまでと同じ形で進めていくことが難しくなっていると考えられます。

このような社会的背景の変化とそれに伴う価値観の多様化、ライ

### 社会環境の変化とスポーツ



スポーツ環境の整備が必要

フスタイルの急激な変化は、人々のスポーツへの関わり方にも大きな変化をもたらし、「する」スポーツだけでなく、「みる」「ささえる」などのさまざまな関わり方が存在するようになってきました。

「する」スポーツは、子どもから大人まで、誰もが同じルールで気軽に楽しめるニュースポーツや自然環境を楽しむアウトドアスポーツ、スケートボードなどコンクリートの上でも楽しめるストリート系のスポーツなどたくさんの新しい分野を生み出しました。

また、「みる」スポーツとしては、日本のプロ野球やJリーグはもとより、衛星放送やインターネットを使うことによって、誰でも簡単に世界のスポーツをリアルタイムで楽しむことができるようになりました。特に近年では、世界のトップレベルのプレイを楽しむことのほかに、日本を離れ、世界で活躍する日本人選手が多く現れたことから、ますます「みる」スポーツへの関心が高まっています。

「ささえる」スポーツでは、1998年のオリンピック長野冬季競技会や2002年に日韓共催で開催されたサッカーワールドカップで、たくさんのボランティアの方々が活躍されました。このことは、自己の持っているノウハウを活かし、スポーツイベントをはじめとする各種のスポーツ活動の場面において支援することにより、自己実現や自己充実を図ろうとする人々が増加しているという傾向にあることを示しています。

このように、スポーツには、運動能力の高い人たちだけではなく、様々な目的のもとで、子どもからお年寄りまで、多くの人々が関わるようになりました。

